

個人の苦境から歴史伝統における「有情」を体得する

沈従文の土地改革期の家書を読む

著・張新穎／訳・阿部幹雄／解題・坂井洋史

解題

本論文は、一橋大学大学院言語社会研究科二〇〇八年度研究プロジェクト「中国現代文学研究ネットワークの構築」の正式な発足に先立つイベントとして、二〇〇八年三月二五日に開催されたワークショップ「張新穎氏（復旦大学中文系教授）を囲んで」における講演原稿に基づき、若干の修正、整理を施したものの翻訳である。張氏は、二〇〇七年度 Hitotsudashi Invited Fellow Program の助成により招聘された。

張新穎氏は、一九六七年生まれ、山東省招遠の出身。現在、復旦大学中文系教授、文学博士、博士生导师。中国現代文学研究会および中国当代文学研究会理事。同時代の文学状況に対する文壇評論活動（二〇〇五年『南方都市报』主催「華語文学传媒大賞」文学評論家賞）、中国文学のモダニティの特質と可能性に関する研究、馮至や穆旦らのモダニズム詩研究、沈従文、魯迅をはじめとする近代小説研究、と多方面において優れた業績を上げてきた。その研究は、巨視的な文学史的把握と織

細なテクスト・リーディングをバランスよく結合したもので、将来本国の学界を担っていくと囑望される存在である。著書に『樓居与遊牧之地』（学林出版社、上海、一九九四）、『岐路荒草』（上海人民出版社、一九九六）、『迷失者的行踪』（復旦大学出版社、上海、一九九八）、『二〇世紀上半期中国文学的現代意識』（三聯書店、北京、二〇〇一）、『火焰的心臟』（花山文芸出版社、石家莊、二〇〇二）、『黙読的声音』（広東教育出版社、広州、二〇〇四）、『読書這麼好的事』（広西師範大学出版社、桂林、二〇〇四）、『沈從文精読』（復旦大学出版社、二〇〇五）、『双重見証』（江蘇教育出版社、南京、二〇〇五）など多数がある。

本論文は、一九五二年に四川省南部の土地改革に参加した沈從文が、妻と二人の息子に宛てた一通の書簡を採り上げ、同時に書かれた他の書簡も参照しながら、激変する社会への〈適応／違和／拒絶〉の間で揺れ動く沈の内面に分け入ろうと試みる。張新穎氏は、趙樹理をはじめとする「土地改革文学」に「新興文学」が、目下の人事（「変」）を自然や歴史という「背景」（「常」≠「不変」）と結合せず、複雑で活き活きとした現実を単純化しているとする沈從文の不満を手掛かりに、沈の生命と歴史に対する独自の理解を抽出していく。沈は、寂しく『史記』を読み、その内容よりむしろ作者に思いを馳せ、愛憎や情感を重んずる「有情」の態度で現実と歴史に向き合った作者と自らを同一視したという。「有情」は歴史上「事功」（世俗的な成功を重んじる功利思想、政治的プラグマティズム）と対立し、今もまさに「有情」は「事功」への奉仕を強いられているが、それは即ち、自我と現実の関係の再調整の強制であると、沈には考えられた。自らの認識や知識を育んできた五四新文化伝統に拠ってしては、もはや理解、対応することの不可能な、従来の自我との間に不調和や軋轢を生む他ない現実の重みを、悠久の歴史伝統の中に自我を系譜付ける（「有情」への同定）ことにより、辛うじて支えようとする、沈の思想的な抗いを、張氏は書信の丁寧な解読を通じて浮き彫りにしている。『沈從文全集』刊行を期に、大量の家族宛書簡が公開されたが、本論文は、そのような新資料を、着実な手法で沈從文理解に活用したもので、今後の沈從文研究展開の方向性と可能性を指し示しているといえよう。

一 簡単な前書き

一九五一年一月二五日、沈從文〔以下、漢数字による注釈番号は訳注を、アラビア数字による注釈番号は原注を示す——訳者〕は北京の土改工作団〔註〕に同行して、四川の農村における土地改革に参加するために旅立った。この団はおよそ六百名から成り、まず汽車で漢口へ、そこで二艘の船に分かれ重慶に出、さらに分散して農村へと赴いた。沈從文は一月四日に重慶に着くと、第七団第四隊に配属され、一月一三日に砂糖を産する川江県の第四区烈士郷駐屯地に到着した。翌年の二月下旬に土改工作団の仕事がようやく終わると、重慶で解散式が行われ、再度船で漢口まで行き、汽車に乗り換え北京へと向かった。自宅に着いた時は、すでに三月上旬だった。その間、およそ四ヶ月であった。

一九四九年初頭における沈從文の「精神異常」は秋から冬になる頃には、次第に回復していった〔註〕。一九五〇年三月、華北政治大学に入り、政治学習を受け、間もなく組織編制に伴い、華北革命大学に転じ、一二月に卒業した後、歴史博物館での仕事に戻った。土改工作団に参加する前、彼はこの件に関して丁玲〔註〕に尋ねた。「彼女の『党の利益になることは何でもすべきであるし、そうでないのならばすべきではない』という見解は沈從文の心に深く刻まれた」〔註〕。公平に言って、四川南部の農村への土地改革行は、たとえ条件が苦しく、病気に悩まされていたとしても、革命大学で過ごした日々よりは概ね愉快なものだったろう。革命大学では空虚な理論を学習するだけだが、土改工作団では実際に山水風物と現実の人事に触れるのであり、同じ「教育」にせよ、沈從文が後者を受け入れたいと望んでいたのは明らかである〔註〕。同時に彼は、内心ひそかな願望を抱いていた。つまり、身を以て歴史変革に参与するというこの機会を借りて、新時代と結びついた文学の方法を見つけ出すべく試み、創作を再開することで、創作能力を取り戻したいという願望である。

土改工作団での四ヶ月余りの間、沈從文は大量の家族宛て書信を書き、土改工作団の経緯、見聞、感慨、思想を詳細に描述して、この時期の彼を理解するための、極めて貴重な一次資料を残してくれたのだ。書信が含む情報は多岐にわたり、豊富かつ複雑で、不用意に取り扱うことはできない。ここではこの時期の全ての書信を取り上げることにはせず、『史記』を夜中に読んだことについて語った書信のみを取り上げ、その他の書信も参照しつつ、この時期の沈從文の感情と思想を考えてみることに

にしたい「以下、当該書信の引用には太字を用い、参照した他の書信とは区別する——訳者」。

二 「声々耳に入る」

この書信は一九五二年一月二五日に書かれたもので、この日は旧暦の一二月二九日に当たる。前日、沈従文は書信の中で年越しについて語っているが、彼の年越しのやり方とは、「一年を振り返りつつ年を越す」というものであった。

書信は家族全員に宛てられており、呼称はそれぞれ「叔文、竜、虎」となっている。この時期における沈従文の書信は、妻に宛てたものが最も多く、子供に宛てたものがそれに続き、妻と子供の両者に宛てた書信は僅か四通しかないが、この四通の書信がかなりの重要性を持っているのだ。

「この工作隊の仲間達はみな用があつて出かけてしまい、私は『留守番』になっているのだが、夜中になると、一方の板壁の向こうでは、老婦人が肺病におかされ痰混じりの咳に苦しむ夫と、二十歳も超えた息子を罵倒する。三言しゃべれば、必ず罵倒の常套句が挟まれ、声も高らかに、罵るほどに意気盛んである。もう一方の板壁の向こうでは、これまた喘息に悩む若者が、一晚中咳込んでいる。板挟みの攻撃を受ける状況で、この得難い教育を大切にしようとするれば、おちおち眠ってなどいられない。」

これが、彼が住まい、身を休める環境だったのである。壁向こうの夜の罵声については、実は一九五一年一二月一三日付けの家族宛て書信ですでに報告されており、その時の描写はいっそう具体的である。「壁向こうにある一家が住んでおり、夜中に鼠が戸板を齧って、我々の側に来ようとしている。向こうでは女がくどくどと罵っている。『くそつたれが……』、そして床を揺らし、床の縁を叩くが、それも役に立たない。そこで今度は竹竿でやたらと叩き出し、あたりかまわず叩きつける。木桶、甕、家財道具、戸板、何でも叩く。しかしネズミは算笥だか桶だかの裏にでも隠れているのだろう、どのみち竹竿が命中することなどあり得ぬと分かっているのだ。床の上で罵りながら叩いていると、ネズミは動きを停める。竹竿が停まると、ネズミはまたぞろ動き出す。夜通し騒いで、その一切は、まるで見慣れぬ来客を歓迎するために行われているかのようだ。この住い

には寢床が四つあり、五人が住まっているが、他の者は県へ会合に出かけて行ったので、私だけがこの騒ぎを夜っぴて聞いているのだ。特に夢見心地で罵声を聞いていると、遙か異国にでもいる感じがする。両隣および鼠はクタクタになるまで騒いで、やっと終わりとなる。目覚めてみれば、頭は重く、動悸は激しく、中庭で建物の背後の茫々たる霧と、竹の梢から露が滴るのを見るのだ……こういう時に杜甫を読むと、その良さと主題の適切さが容易に理解される」³⁰。一九五二年一月二〇日の書信でもまた、壁向こうの老夫婦は毎夜必ず口喧嘩をするが、日中は全く息を潜めていることに言及し、「生命とはかくも恐ろしいものだ」、「ゾラだけがそれを書く勇氣があるだろうし、ゴーリキーも書いたことがある」。「罵り合いからは、生命がまだ極めて強く保たれていることを見出せるのに、昼間見かければ、口を利くのも億劫な様子。争いにおける精力の充満、声の猛々しさは、老衰した生命と好対照である。奇怪の極み、恐ろしさの極みだ。このような生命のありようは、普通のそれとは全く異なると理解され、実に恐ろしいものだ。」³¹

一九五二年、沈從文はひそかに、僅かな字数の短篇「中隊部——川南土地改革雜記之一」の創作を試み、この壁を隔てた一家を描いている。「四番目の家族は、貧農か中農か、富農かは定かでないが、三人口で、老夫婦はすでに六十を過ぎ、若者は二十六歳である。この一家は一〇月に烏竜寺から引越してきたばかりである。もとは道士で、廟の守りをしながら、廟内でささやかな畑も作っていた。烏竜寺が保国民学校³²につくりかえられたので、一家は山をおりてきたのだ。……昼間は一家三人が竈の間に座り込んで、豆を煮炊きして食べているのだが、一言も言葉を発しない。毎晩、真夜中になると、いつも突然罵り合いを始める。老夫婦が互いを罵り合うこともあれば、夫婦して子供を罵倒することもあり、その声はまるで錆びた包丁で空の鍋底を削るよう。ガリガリやっていたかと思えば、ふと止む。息が切れるほど罵倒しまくるのだ。さらに年寄りや夜中に咳込み、それが明け方まで続く……」。春節の後、老道士は死んだが、その日のうちに埋葬された、「住居全体の様子は普段のままだったが、ただ夜に便所に立つと、竹林のあたりに、あるものが見えた。竹竿に白い紙で作られた小さな提灯が結わえつけられ、提灯の中には小さな碗があり、油が入っている。か細い灯火は、生死の間の僅かな繋がり象徴していた。それ以外には何もなかった。」³³

ネズミを叩き罵るにせよ、夫と息子を罵るにせよ、夫婦間の喧嘩にせよ、沈從文は煩を厭わず描く。なぜか？ 単に自分に

影響を与え、邪魔してやることへの不満を述べようとしただけなのか？ 完全に自分の生活を中心に考えるのなら、これらも自分が生活する環境の一部というに過ぎず、自分に有益か否かという点から評価を下すことも免れないだろう。もしもそこまで自己中心でないとするれば、これも生活である、別の違った生活なのだと意識されるはずだ。沈従文のこのような生活についての受け止め方は、時期によって異なるが、しかし、それ自体一種の生活であり、この種の生命のあり方を理解する必要があると意識していた点については一貫していた。たとえ、そのような生活や生命のあり方が、ゾラやゴッリーキーのような作家にしか描く勇氣のなかるうほどに恐ろしいものであるとも。事実、沈従文というこの「唯美」的と見なされてきた作家が、一度ならず再三にわたり、この聴くに堪えない声音を描いているのだ。一月一三日の書信では、彼はさらに別の泣き声と罵声を書いている。「壁を隔てて、三歳の子供が悲しげに泣いており、とても辛い気分だ。大人達は構いもせず、ただ子供が泣き続けるのを聴くだけ。私は泣き声と例の女が息子を罵る声を聴いていると、両のあばら骨が痛くなり、この手紙を微かな灯りの下で書き続けている。手足の血がみな胸に集まってくるようだ。」^①「風声雨声、読書の声、声々耳に入る」^②といったところだが、実際は書齋でそう口にしてみるように風雅なものではなかったのだ。

別の生活、別の生命のあり方を意識し理解するのは、風雅でないばかりか、恐ろしく、苦しく、辛いことかもしれない。土改工作団駐屯地に入って、幾らかの人事に触れるとすぐに、彼は妻に書信で次のように語っている。「一人の人間が、もし本当に別の人間の生命（魂）のあり方を理解しようとするなら、それは本当に恐ろしいほど重苦しいことだが、私はきつとそれをしつかりと文字に表そう。……私は苦難の面も見ているが、同時に新たな息吹という面も見ている。これらを目にしたがら、さて踏み込んでそれらを表現しようとする、ある種の責任感のせいで、些か茫然とならざるをえない。」^③

興味深いのは、このような生活に遭遇した後、彼が「こういう時に杜甫を読むと、その良さと主題の適切さが容易に理解される」ということだ。どのような「良さ」だというのか？ どこが「主題の適切さ」なのか？ 彼は続きを語っていない。では、「板挟みの攻撃」の状況において『史記』を読み、そこに何を讀み取ることになるのだろうか？

三 新興文学についての見解

「古人は、灯心を剪りながら夜に読書したというのが、ここに来て、そのような幸せに恵まれようとは思ってもよらなかった。暫く新しい本を読んでいると、気分と視力が続かない。都合よいことに、ひと月ほど前、ここの砂糖小屋の外にあるゴミの山から一冊の『史記』列伝の選集を掘り出したので、それを旧式のランプの下で繰り返し読んで、長い夜を過ごしている」。

彼はまず「新しい本」を読んだが、それにはちょっと目を通しただけであった。もし「視力」が役に立たぬことが原因だとしたら、『史記』を読むにも同様の問題があったはずだ。あるいはその『史記』選集の印刷が、「新しい本」に比べて「視力」に優しかったからだろうか？ しかし、ランプの下で「何度も繰り返し読」むことができ、「長い夜を過ご」すことさえできたというのであれば、どうやら「気分」がやはり主たる原因だったのだろう。

「新しい本」はなぜ「気分」と合わなかったのか？ ここでいう「新しい本」が、具体的にどの一冊あるいは複数の本を指すのか、特定することはできない。しかし、この時期の沈從文の書信がしばしば話題にする「新しい本」とは、当時の社会情勢と密接に関係している土地改革文学を指しており、さらに範圍を広げていえば、新政権のイデオロギーの要求に合致する新興文学を指すのである。書信が何度も言及する趙樹理の『李有才板話』は、一九四三年に発表、出版されたものではあるが、五〇年代初期の土地改革時期においても、依然として「新時代」の文学の高みを示す作品であった。その五日ほど前（一月二〇日）にも、彼は趙樹理が一九四六年に出版した『李家莊の変遷』を読んでいる。これより前、土改工作団駐屯地に向かう途上、船に乗る際、沈從文は二人の子供に手紙を書いて、すでに次のように語っていた。「君達は趙樹理を好きなようだが、お父さんは君達にもっと多くの李有才を書いてみせるよ」⁸。「君達のために四川での土地改革の出来事を使って、きつと何か書こう。『李有才板話』のように、人民が立ち上がるために尽くすのだよ」⁹。しかし妻に向かって、自分が書こうとする作品について語ると、それは子供達に語るのとは違っていた。「これら農村の話は、古くもあり、新しくもある。事柄は古くとも、問題は新しいのだ。李有才の物語に比べて複雑で深いものかもしれない」¹⁰。「再度『李家莊の変遷』を読んでみたが、語りは質朴、出来事の描写もよく、人物もよく書けているが、ただ過程があまりすっきりしていない、……背景が表現にあって粗略

に扱われ、……それが玉に瑕だ」¹¹⁾。後に、実際に農村の土地改革における人と事とに触れてからは、彼の子供達に対する口調も変わる。彼はいう。現実における人と事は、「趙樹理が描くものよりはるかに活き活きしている」¹²⁾、「多くの物事は、例えば君が『暴風驟雨』¹³⁾という本から見て取るよりは、遙かに曲折に富み、胸を打つものだ」¹⁴⁾、さらには「君が読んでいる土地改革小説は、取り上げる事件がどれも余りに単純に過ぎる。このちっぽけな村で起きる事件にさえ、李有才流の物語や、もっと大事な、他の物語が沢山ある。」¹⁵⁾とまでいうのである。土地改革の現実を置きながら、現実をなおざりにし、土地改革小説を読んでいる人間については、彼はなおのこと納得できなかった。「若者は、村の中には見るべきものは何も無いと思つて、すぐに部屋に戻つて土地改革小説を、他人が書いた短篇を読むのだ」¹⁶⁾。

彼がいう「新しい本」とは、必ずしも直ちに趙樹理や周立波の作品を指すわけではない。その他の土地改革作品であつたら、彼は大半に見向きもしなかつたであろう。ではこれらの新興文学はどうして彼の「気分」と合わなかつたか？ 彼は新興文学にどのような問題があると考へていたのか？

駐屯地に向かう途中、巫山を船で通つた時、沈從文は兩岸の景観に心を奪われ、川沿いの小さな村に暫くの間滞在できれば、「筆を執ることができるようになるため、大いに役立つ」と感じた。「背景の雄大と人の世の事を対照させ、人事をこの背景の中で進行させれば、作品はきつと完全な成功を収めるだろう。土地改革を描くにも、自然の背景は必要だ！」「しかし、あらゆる人事の発展は、自然の背景と引き立て合ねばならぬのに、自然の景物も作品の一部であることが分かつていない！」¹⁷⁾、大自然の「静」と歴史が大きく変化する際の人事の「動」を結合しなければならぬのに、この点については、趙樹理の作品でも、「背景が表現にあつて粗略に扱われる」のを免れないといふのである。表面的には、これは描き方の問題のように見えるが、実は、人事と歴史の大変革の、世界における位置を、いかに理解するかに関わるのであり、大きな問題であるといわざるをえない。沈從文自身の経験に拠れば、自然の背景は、人事の変動などより、遙かに大きな存在である。たとえそれがいかに激烈な変動であつても。一九五二年一月四日、彼はある五千人規模の大会に出席したが、その会は「極悪の大ボス」を「片付ける」とともに、約四百名もの地主を引立てて、批判する会でもあつた。規模も大きく、賑やかな集会で、「全くのところが、歴史上の奇観であつた。あたかも人々がみなある不可解な力に支配され、時代が定めた行程を歩んでいるかのようだつ

た」。しかし、このような盛大な集まりと時代の行程を、自然の背景と対照させた時、「奇異」な光景が浮かんでくるだろう。「大会が終わり、各自散会する時、みな大抵黙ったまま声もなく、来た時と同様、山道に長い列を作って、徐々に丘陵の竹林の中に消えていくのだ。この情景はあまりにも奇異であり、またあまりにも荘嚴である。いかなる書物も、かつてこのように描いたことなどなかった。自然の背景があまりに静かなので、銅鑼や太鼓の音を聴いても、その音はみな大地の静けさに吸い込まれてしまうのだ。特に山道で銅鑼や太鼓を鳴らす場合、不思議なことに、いつでも街中におけるような賑やかさはなく、却って人に異常なまでの静謐感を与えるのだ」¹⁷。沈従文は、ひとたび文学を、自然を語ると、往々にして「我を忘れて」しまうのだが、彼がこの感慨を生じた当時は思いもよらなかつたであろうことに、時代の大きな変化が「大地の静けさに吸い込まれてしまう」という感覚は、明らかにイデオロギーの制約を超越していたのである。

沈従文は、さほど「我を忘れて」いない時には、自分の考え方が新興文学と抵触することもはっきり意識していた。「眞の農民文学が勃興すると、おそらく基本的にプチブル文学とは異なるものになるだろう。即ち物語だけがあって、風景や背景の感動的な描写は全くないものになる。なぜなら自然や景観に対する愛好は、実は農民の感情ではないからだ。それは労働者の感情でもなく、プチブルの感情に過ぎない。将来新たに勃興するであろう農民小説は、ただ物語を記すだけで、背景を描くことはないだろう」¹⁸。彼は「階級」から文学の相違を区分するほどに「理知」的になることもできたことだが、しかし、明らかに納得はしていないので、すぐに続けて次のように語る。「背景の優れたものに対して愛着が生じ、比較をすることで異なる印象を見出す、そして郷土愛から記憶や印象を甦らせることで、ようやく筆の描くところとなるのであり、かくして初めて、書く時に感情が生じるのだ。四川の人々は絵画の中に生きているというのに、それを文字で表現することを知らない。それはご当地の画家と同様で、日頃接する自然から学ぶことに長けていないということだ。学ぶことについての心理状態が改善されないなら、地方文学も、決して大きくなっていかないだろう」¹⁹。

別の面で彼が新興文学に不満を覚えたのは、社会の変化を描くのに、歴史と結び付けない点である。やはり巫山を船で通過した時のこと、彼は手紙にこのように記していた。「川江が与える印象で、極めて活き活きしている部分といえ、それが歴史上の様々な事と結び付けることができる点である。ここには杜甫もいれば屈原もいる、その他の諸々もあった。特に私を感

動させたのは、太古の風を遺す山村、そして川面を行き来する帆船、船引き人夫が三々五々岩石の間を動いている様などである。それらすべてが二千年前、あるいは一千年前と同じ有様であり、生活様式もほとんど変わっていないことが十分想像できる。しかし、それがこの激動する世界に存在しているのだ。世界がまさに計画的に変わろうとしている一方で、これら一切は川の魚や鳥、山の木々と、おのずから結びつき一体となり、この激動する世界に存在し、全く静かだ。両者を対照した時、どうして感動せずにいられようか」^②。沈從文が求めたのは、単純な歴史感覚ではなく、「常態」と「変動」に対する、深い感情と遙かな関心だった。彼は、一緒に土地改革にやってきた人々について語る。「この素晴らしい土地に対して、彼らはまるで何も感じることなく、驚きもしない。彼らは、土地がかくも肥沃なのに、人民がかくも貧しいのは、単に過去における封建搾取の結果だと考えるだけで、より深いところにある問題を見て取ることができず、この対比における社会、人事の移り変わり、および移り変わりの中の人事において、最も活き活きとした諸々を見ることができず、この土地が、土地改革後三年あるいは十年経って、どのような風景を見せることになるのか、どのような風景になり得るかを考えて神を勞することに、大して興味もないようなのだ。いい換えれば、深い愛と遙かな関心というのは容易には生まれまいということだ」^③。

根本の部分でいえば、自然と結びつくことができず、歴史と結びつくこともできないのは、「有情」^④を欠くからである。「有情」とは何か？ 続いて彼は『史記』を読むことになるが、その際の核となる感慨こそ、この問題を語っているのであり、それはまたこの書信の鍵でもある。

四 「有情」と「事功」

「李広、竇嬰、衛青、霍去病、司馬相如」らの列伝を読んだが、知らず知らずのうちに、あたかも二千年前の社会に、作者の時代の生活状況に、そしてこれを書いた時の情感の中に、引き戻される感じがした。」注目すべきは、沈從文はこの時『史記』列伝を読んで、作者が書いた内容に惹きつけられただけでなく、司馬遷という作者自身にも惹きつけられたのであり、作者を理解し、自らと重ね合わせることで、「作者の時代の生活状況に、そしてこれを書いた時の情感」に「引き戻される感じ

がした」という点である。

本来なら、続けて『史記』とその作者について語るべきところを、彼はそれをしようと思わず、筆は脇に逸れると、往時を語り出す。「想い起こせば三三、四年前、やはり年末に大雪が降ったが、私が麻陽^{三三}の、張という地主の家に厄介になっていた時、似たような経験をしたことがある。桐油の灯りの下で『列国志』^{三三}を読んだのだ。その家の主人はとくにこの世にいないし、屋敷も焼けてだいぶ経つが、家の中の色々なものや、当時の逗留の印象は、とても明晰に、ありありと今この時の記憶に甦ってくる。ネズミが木の器を齧る音まで甦り、生命の中に戻ってくる。」この旧事と目下の状況の似ているのは、一人孤独で寂しい状況の中で、長い歴史を持つ書物を読むという点である。

このような旧事を語ることに、どのような意味があるのか？

自覚的に旧事を追憶するとは、実は意識して個人の生命の足跡を遡ることである。一日前、即ち一月二四日、沈従文は追憶に没頭した。一人での年越しということから、彼はまず湘西^{三三}辰州における、三回にわたる一人での年越しの情景を思い出す。この三回は、それぞれ人生の異なる段階で行われた。最初は、二十歳そこらかの時、船上で、もう銅貨一枚しか残っておらず、「生命は完全に単独で、面前の一切と遊離しているようで、実は融け合っていた」。二度目は一九三四年、帰省して母親を見舞つての帰路、小舟で川を下る時のことであり、「生命は単独のようだが、実はそうではなかった」。この時の沈従文はすでに著名な作家であり、『邊城』^{三三}は書き始められており、旅の途上、新婚の妻に宛てた書信は、その後すぐに『湘行散記』^{三三}に書き改められ、彼の湘西を題材にした作品の代表作となった。三度目は抗日戦争が勃発した後、南下する途中のこと、彼は長兄の家で年を越した。同行者は麻雀に出かけていき、一人暖を取りながら、二人の子供と現在進行中の戦争に思いを馳せていたのである。さらに別の二度の年越しについても、四川内江で「一年を振り返りつつ年を越す」際に思い出していた。一度は、一九二〇年に鳳凰^{三三}高峴郷に客居していた時のことで、二十年以上後に書かれた小説「雪晴」^{三三}は、この時の経験に基づいている。当時まだ従軍していた彼は、「何も書きはしなかったが、生命はこれらの人事や景物と結合して、茫洋とした希望と理想に火をつけたものだ。まさにゲーテの青年時代と同様、『これは取っておかねばならない!』というわけで、かくして別の時に至って、文字と仕事に反映され、生命存在の一部になったのだ」。もう一度も従軍していた頃、銅鑼や太鼓

が鳴り響く保靖^(二)の地にあって、一人石油ランプの下で本を読んでいた時のことで、「読んでいる本はどうやら『漢魏叢書』^(三)の風俗について記したところだったようだ」。これらの、時の背後に忘れ去られながら、再び記憶に甦ってきた年越し風景が、個人の生命をひと筋に綴り合せる。その筋を首尾一貫しているのは、生命の単独と寂寞、そして単独と寂寞の中から生長してきた感情と思想なのである。彼の文学の来し方はまさにここにあり、このようにして基礎が据えられ、成就していったのだ。

旧事を追憶した後は、回り道せず、直ちにいう。「いい換えれば、寂寞こそが、事物を生長させるのであり、それはいつでも不可思議なものである！」これは自分のことをいっているのだろうか？ そうである。しかし、自分のことをいうだけではなく、個人の経験は、たちまち長い歴史と伝統の中に帰着させられ、再び回り道せず直接次のようにいうのだ。「中国の歴史の一部分は、情緒の部分の発展史に属す。もしも歴史上の人物から深く立ち入って分析してみれば、情緒の成長が大体の場合、寂寞と分かち難いと分かるだろう。」

「寂寞」が「有情」を生長させる。そして以下では「有情」が語られる。

「東洋思想の観念的傾向と有情とは切り離すことができない！『有情』と『事功』^(四)は、時に合して一つになることもあったが、多くの場合は対立するものとして存在し、一種矛盾としての対峙を形成してきた。人生に対して『有情』であれば、しばしば社会における『事功』と背馳し、こちらにかまければ、あちらを失うということになり易い。管仲、晏嬰は『事功』を成し、屈原や賈誼は『有情』であった。だから『有情』は常に『無能』である。今にしていうなれば、『無知』たるを免れない！いうだにおかしいようだが、決しておかしくなどない！この歴史における現実をなおざりにして、別に解釈を施し、円満周到に解釈したとしても、それは依然として本来の姿ではない。必ずや『異』を認め、その上で『同』たる所以を求めてこそ、結果も生まれよう！」

なぜ「有情」は「事功」との矛盾と紛糾の中において語られねばならないのか？一月二十九日に張兆和^(五)に宛てた書信の中では、次のように語っている。「管仲、晏嬰、張良、蕭何^(六)、衛青、霍去病は国家に対して当時功績があったが、屈原、賈誼……等々は有情であった。あるものは実際の任務に近づくことで能力や知識を伸ばしたが、あるものは生憎そのような機会

から隔離され、却って情感への関心を育んでいった。思想史上の出来事を考えると、事功と有情を結合して一体化させるのは、簡単ではないと分かる。少なくとも、近代科学においてすら、この件は未だなお具体的に解決されていないのだから。なぜ「有情」と「事功」を合して一つにする必要があるのか？「政治は両者の結合を要求するし、かつ様々な努力をしているが、方法はなお模索中であり実験中なのだろう。より深いところで、功能と情感の違いを理解できていないからである。ただ『有情』を目下の『致用』の中に統合しようと強調するだけでは、結果は望めない」。

これで明らかになったであろう。沈従文が語ろうとしたのは、自らとも、現在の情勢とも関係のない理論の問題などではなく、自身が今まさに遭遇する思想上、文学上の苦境についてだったのだと。政治は「事功」を、「致用」を求め、果てには「事功」と「致用」を基準と尺度に据え、もしも「有情」が基準に到達せず、尺度に符合しなければ、「無能」、「無知」と判断しかねないのであった。沈従文は、まず『異』を認め、その上で『同』たる所以を求め、べきと考えていたが、これは「有情」と「事功」を平等の地位に置き、一方で他方を量り、判断し、裁断することはしないということである。しかし、政治とは必ずしもそうはしないものだ。

五 作者の生命の「重み」、「成熟」、「苦痛と憂患」

「かつて私は『史記』から深く影響を受けた。その筆遣い、人物を描き出す方法に啓発されるだろうと思っていたことだったが、今になって、大事なのは、やはり作者自身からの様々な影響であることを、ようやく悟った」。

「今」理解していることが「過去」に思っていたより一歩進んでいるというのは、『史記』およびその作者についての理解が一歩進んだことはもちろん、自己に対する認識も一歩進んだということである。認識の深化を促したのは、主として彼が被った挫折、失敗、そして困難が幾重にも重なる現実の境遇だった。彼は個人の生命の曲折に富んだ来歴から、偉大なる文学を創造した作家達と直接向き合い、理解し合うことを体得したのだ。「文学史における過去の業績から作者を見ることで、作品と作者の感動的な結びつきを、より一層深いレベルで理解できるようだ。普通、作品の深さは作者の生命と一致している。屈原、

司馬遷から杜甫、曹雪芹、そして魯迅にいたるまで、発展の仕方こそ異なれ、その状況は似ており、いずれも人生に対し、存在に対して会得するところがあったのだ」⁽⁸³⁾。

「『史記』列伝における人間の描き方は、あつさりとした筆遣いだが、二千年を経た今にしてなお、一枚一枚描き分けられた肖像画のように、個性は鮮明で、雰囲気も真に迫っている。重要なものは、常に二言三言の言葉ではつきりと説明して、少しもくどくないのに、正確で活き活きとした効果を収めていることだ。いわゆる大手筆とは、まさにこれである。『史記』のこのような長所は、これまで殆ど奇跡のようなものと考えられ、学ぶことも、理解することもできないとされてきた。それでも分析を試みると、やはり内容の区別に応じた扱いが可能である。『書』と『表』は『事功』の部類に属し、諸々の『伝』や『記』は『有情』の部類に属す⁽⁸⁴⁾。事功は学び得るが、有情は知り難い！中国の史官は事功に属する条件を具えている。つまり歴史を記録するという原則のもと、筆は常に分際をわきまえ、胸中確かな見通しを持って後に取捨選択を施し、かつ封建制度の中心思想に忠実であつて、そこで初めて準則を持つのである。『史記』の作者が掌握する材料はたくさんあつたらう。六国以来の雑多な伝記は特に性格の表現を重んじ、また前漢時代の行文の習慣にあつては、文体や文法の拘束を受けることがさほどない。特に重要なのは、やはり作者の人、事、問題、社会に対する態度であり、歴史に対して具えた態度であつて、それは伝統的な歴史家が具えた抱負であることはもちろん、時代の只中を生きている作家の見解を示すものでもあつた。」

数日後の書信の中で、再びこの話題が取り上げられているが、表現はより簡潔である。「……列伝が人物を描く際、多くの筆を費やさないが、二千年を経てなお、一枚一枚描き分けられた肖像画のように、髭眉の細部まで真に迫り、眼は活きているかのようだ。そこで用いられる方法は全く不思議なものである。それはどうやら当時の作者の、人、事についての理解と認識、作者個人の生命が担った時代の重みと関係があるようだ」⁽⁸⁵⁾。『史記』の非凡な達成とはどのように獲得されたものか？沈從文の思考は、すぐさま作品から作者に、文章から人生へと跳躍する。「作者個人の生命が担った時代の重み」、これこそ勘所である。耐え難い生活に遭遇した後に杜甫を読めば、その「良さと主題の適切さが容易に理解される」と前に述べていたが、それは、主としてこのことを指しているというべきである。

「このような態度の形成は、一個の人間が、その一生にあつて各方面から受けた教育の総量と関係している。いい換えれば、

作者の生命とは、重みを持ち、成熟したもののなのだ。またこの重みと成熟とは、いずれもみな苦痛や憂患と関係しており、単に勉強を積むだけでもたらされるものではない！」

前に述べられた、個人の生命の歴史の追及とは、実は個人がかつて経験した中から受けた「教育の総量」を量ることである。人生で受ける「教育の総量」と人生が担う「時代の重み」、および個人の生命それ自体の「重み」は、それらを語る際にはいづれかに重点が置かれようが、実際には分かち難いものである。さらに一步進めて、「苦痛や憂患」をいうことで、よりいっそう情感と思想の核心に迫る。この「苦痛や憂患」は、個人で引き受けるものだが、そこに盛られた内容と重さは、歴史、時代と密接に関連している。ただこの関連は、歴史と時代の「事功」や「要求」に素直に従ったり、それを満足させることでもなければ、時流に追随することでもない。「千人万人が歴史の只中で動き、ある者は一時代に赫々たる功名を揚げ、ある者は巨万の富を築き、今そこに存在するものは千年不変と考える……しかし、時が経てば何も残らず、消えてしまう。一方、次のような人々も僅かながら存在する。歴史に随って動き、永遠に耐え難い困苦と寂寞、苦痛と挫折の日々の中で生命を保ち続け人々である。時に逢わなかったことが却って幸いして、つまり、彼らはそのような教育により、一切の存在に対する情熱を生命に具えさせることができたのだ。あらゆる世事から画然と疎外された状況にあって、精々身辺の存在を印象に留めることしかできず、そこには脈絡条理も全くないのだが、しかし、それらがひとたび統合、整理され、そして文字に反映された時、『詩経』の国風、小雅^(二五)が、『史記』が、『国語』^(二六)が生まれ、また建安七子^(二七)が、李白と杜甫が、陶淵明と謝靈運が生まれたのである……時が過ぎ、英雄豪傑、王侯将相、美人名士のすべては、すべて塵土と化し、存在意義を失ってしまった。他方、生きている間も、死んでからも寂寞の中にあつた人々が文字に残したものは、歴史を繋ぎ合わせ、自他を疎通させる唯一の手段となった。これにより歴史は連続し、時空間に阻まれていた情感も、千載百世の後の今にしてなお目の当たりにするかのようである。」個人の体験に基づき歴史を体得し、伝統を会得する、そして歴史と伝統に照らして自己を確認し、眼下の運命を受け入れる、ということである。「人民の新たな時代においては、何もかもがかつてと違うが、この過程で、歴史の矛盾から、旧時代のある種の人達と同じ状況に置かれるような人間が現れることは、恐らく免れ得ないだろう。……一切を受け入れ、そこから一切を学習すべきである。……私は自身と自身の社会的関係について改造中である。努力はしているが、獲得できるの

は——あるいは依然として例の、耐えられそうにもないが、やはり耐え続けていくことになろう苦痛かもしれない！」⁽²⁸⁾。

「苦痛と憂患」と関連して、作者の生命の「重み」と併せ論じられているのが、作者の生命の「成熟」である。「成熟」というこの言葉だが、思いつきで書かれたものではない。沈從文はこの時、生命に蓄積されたエネルギーが充溢していることを自覚しており、それは条件が許しさえすれば、創作へと転化できるものであった。内江での実際の生活体験は、彼に理解させたのだ。「私の生命は、これらの人事の印象、見聞、景物と上手く結合すれば、必ずや特別な実りを結ぶであろう、……つまり、予想もつけ難い、良好な結果をもたらすだろう。今はこの実りの成長を眺めつつ、他方では、体力が本当に衰え、人事においても挫折し、如何ともし難い能力の消失を見ているようなものだ。崖っぶちの絶对的な孤独の中でこのような存在について理解した時、一層深い部分で古人の、例えば杜甫らの心境が体得できたのである」。沈は住居の近くの断崖の頂によく足を運び、「頂上まで来ると、天地悠々の感を覚える。ここその村落では、我々と同じ隊の人間が仕事をしており、三日も眺めていれば、その一部を実際に見ることが出来る。表面的には私と彼らは馴染みがなく、親しく談笑することも少ないが、実際、私の生命は、彼らの仕事と緊密に結びついていて、いったん機会があれば発露しようとする創造欲を探し求めているのだ。しかし、考えてみればかなり荒唐無稽なこの発想は、容易に人から理解されるものでも、信用されるものでもない。……暖かな風と恵みの雨が実りを助けるのか、それとも迅雷烈風が蹂躪し、枯れ萎ませるだけなのか？ 前もって知るものは誰もいない。私は人の哀れむべきは、つまりここにあると常々いつてきた。人間とは實際脆く、ちっぽけなものである。体力がやや回復した時、私は理解した。新しい歴史の一章一節を、やはり文字を用いて部分的に再現することが出来るだろう、なぜなら文章のリズム感と時代の脈動は一致するからである。私は意識している。もしもかつての仕事に、僅かなりと成果があったとして、この新しい仕事は、必ずや以前のものより成熟し、一定の深さを持ち、しかも普遍性を失うこともないだろうと。生命が、すでに成熟期に到達しているためである。特に人への愛と憐憫については、本質に触れたように思われるし、人間存在について、時代についても理解したようであるから」⁽²⁹⁾。

『史記』の『年表』や『書』が語るのは事功であり、それらは材料を把握すれば完成できる。だが『列伝』は、作者の生命における特別なものを必要とする。大雑把にいつてしまえば、必ずや苦痛を経由して初めて成熟し、蓄積された情感である

——この情感とは、深い理解、深い愛、事功の表層を超えて上を行く理解と認識なのだ。だから、四、五百字で一人の人物を描くに当たり、そこに反映されるのは、作者と伝中の人物、二種類の人格の結合であり一体化である。描くのが帝王将相であろうと、愚夫愚婦であろうと、同じ道理である。」

「有情」とはどこから来るのか？ 苦痛を経て成熟し、そして「有情」となるのである。しかし現実にはこの「有情」が欠けている。即ち「深い理解、深い愛、事功の表層を超えて上を行く理解と認識」が欠けていることだが、それは何故か？ 沈従文はかつてこの問題について考え、次のように述べていた。「どうやらここ三十年来の教育の結果によって、ある種の情感が停滞させられ、鬱積してしまつたようなのだ。また教育が分化し、職業においても分業が進み、こういつた情感は学業や職業の現実的な要請と合致しないので、然るべき年齢にあつて十分に養われることもなく、終始良好な発展の機会を得られなかつたため、次第にこの種の機能の作用が失われてしまつたのである」。近代の教育は、情感の涵養という面で欠けるところがあるのかもしれない、ということである。「この種の、一切全てに対して『有情』であるという状態は、そもそもある種病的な変質に属し、ただ文学や芸術に従事する者だけが具えていけばよいもので、一般の人が具えるべきではないにも思われる」⁽²⁾。たとえ、實際後者のようなことであつて、一切全てに対して「有情」であることは、文学や芸術に従事する者だけが具えるべき態度であるとして、この点から目下の文学や芸術およびそれらに従事する者を評価判定するなら、「有情」は實際稀なのだ。

この書信では続けて現状に対する批判が行われている。第一は、優秀な伝統に学ぶということが、容易に公式化されてしまふ問題についてである。「それを説く者が優秀で偉大な伝統とは何であるか、如何に学ぶべきかについて分かつていなければ、口舌を尽くしても結果など出ないことは、容易に想像できる」。第二に、中学校の国語教育についての批判は比較的具体的である。「近年來、初級中学校三年の国語教科書は、古典から叙事や人物描写の平易な文章を選択せず、大して役にも立たない文章や極めて雑駁な白話文で間に合せているのが常である」。彼が指摘するのは、主として「現代文」である。「同時代の文章だけを手本としているため、ここ二、三年の学生の答案にはすでに弱点が見られるようになった。議論をする際、いかにもそれらしく意見が述べられてはいるが、實際は教条を引き写しただけで、新味や深い知識は少ない。何かを叙述するのでも、

真の情感を見出すことなど全くできない。筆致は平板で、極めて不自然である」。国語教育は情操教育でもあるが、情感がなければ、書くものは「平板」になるしかない。

この書信は終わりの部分が見えず、残されたものはここで終わりになっている。

六 簡単な結論

以上、この家書を解釈してきたわけだが、用いた方法は簡単で、同時期に書かれた他の書信を参照しながら、沈従文の『史記』を夜読んだことに関する記述を解説したのである。この記述は千字余りしかなく、他の書信から傍証に引いた部分は、この字数を遙かに超えている。全篇に引用した文章は、全て沈自身のものだが、これは意識的に行ったことである。つまり沈従文から沈従文を理解する、ということである。「自分に即して考えること」で、『自分』を理解できる／自分に即して思索すること、『人間』を認識できる」²⁸。少なくとも、沈従文を理解しようとする全ての方法の中で、沈従文に即して沈従文を理解するというのは、基本である。しかし、現状はといえば、この基礎的な作業は、依然として十分に行われてはいえないだろう。

それでは、このような解釈を経た今、簡単な概括を行うことができるだろうか？ 私個人の見方はこういうものだ。沈従文は、苦境に陥った時、自覚的に悠久の歴史と伝統の中に、自らを支える力を求めたのだ。彼の苦境は主に二つの面に表れた。即ち、文学面の苦境と個人の現実における苦境であり、この二つは一体と見ることができよう。彼の文学は新興文学から挑戦を受けたが、この挑戦に、彼個人の文学が対応できなかったというだけではない。彼の文学が属する五四以来の新文学伝統にしても、具合の悪い境遇に直面することとなったのだ。即ち、沈は五四以来の新文学伝統に依拠しては、新興文学に対応できなかったのである。ましてや、彼個人の文学にしても、五四以来の新文学伝統の主導的な潮流と完全に一致していたわけではなかった。しかし彼は、新興文学と新時代が文学に対して求めた「事功」「要求」と、完全に一体化することも望まなかった。この時、彼を救い、支える、より強大な力が必要とされたのである。そこで、彼の身の上はずっと潜伏していた歴史意識が彼

を助け、彼はさらに悠久の「伝統」を見つけ出したのである。何千年という歴史を考え、自らの文学の境遇と、自身の現実における境遇も、悠久の歴史と伝統の中に放り込んで見れば、理解でき、慰めを得ることもできる、さらには運命を受け入れ、自己を確認することもできると、会得、体得したのであった。簡単にいえば、彼は自らを悠久の歴史と伝統の連続性の中に放り込み、時代と現実に由来する己の苦境を精神的に克服したのであった。

原註

- (1) 沈虎雛「沈從文年表簡編」(『沈從文全集—附卷』北岳文芸出版社、太原、二〇〇三年)、四三頁
- (2) この書信は『沈從文全集』第十九卷、(北岳文芸出版社、太原、二〇〇二年)、三一七〜三二〇頁。以下に引用する書信はすべてこの全集所収に拠る。「本翻訳では太字の部分—訳者—以下、一九五二年一月二五日付書信には一々施注しない。
- (3) 沈從文「致張兆和、沈竜朱、沈虎雛」(一九五一年一月二二〜二六日)、(『沈從文全集』第十九卷)、二二五〜二二六頁
- (4) 沈從文「致張兆和」(一九五二年一月二〇日)、『沈從文全集』第十九卷)、二九八頁
- (5) 沈從文「中隊部——川南土改雜記之——」(『沈從文全集』第二十七卷)、四八一・四八五頁
- (6) 沈從文「致張兆和」(一九五二年一月一三日)、『沈從文全集』第十九卷)、二八三頁
- (7) 沈從文「致張兆和」(一九五一年一月三〇日)、『沈從文全集』第十九卷)、一八八頁
- (8) 沈從文「致沈竜朱、沈虎雛」(一九五一年一月二八日)、『沈從文全集』第十九卷)、百二六頁
- (9) 沈從文「致沈竜朱、沈虎雛」(一九五一年一月三一日)、『沈從文全集』第十九卷)、一三四頁
- (10) 沈從文「致張兆和」(一九五一年一月一三日)、『沈從文全集』第十九卷)、一六〇頁
- (11) 沈從文「致張兆和」(一九五二年一月二〇日)、『沈從文全集』第十九卷)、二九六頁
- (12) 沈從文「致沈竜朱、沈虎雛」(一九五一年二月二六日)、『沈從文全集』第十九卷)、二四六頁
- (13) 沈從文「致沈虎雛」(一九五二年一月二三日)、『沈從文全集』第十九卷)、三〇三頁
- (14) 沈從文「致沈虎雛」(一九五一年二月二七日)、『沈從文全集』第十九卷)、二五〇頁

- (15) 沈從文「致張兆和」(一九五一年一月一九—二五日)〔沈從文全集〕第十九卷、一七九頁
- (16) 沈從文「致張兆和」(一九五一年一月一日)〔沈從文全集〕第十九卷、一三九頁
- (17) 沈從文「致沈竜朱、沈虎雛」(一九五二年一月五日)〔沈從文全集〕第十九卷、二六七頁
- (18) 沈從文「致沈竜朱、沈虎雛」(一九五一年二月二六日)〔沈從文全集〕第十九卷、二四六頁
- (19) 沈從文「致張兆和」(一九五一年一月一日)〔沈從文全集〕第十九卷、一三九—一四〇頁
- (20) 沈從文「致張兆和」(一九五一年一月一九日)〔沈從文全集〕第十九卷、一七九頁
- (21) 沈從文「致張兆和」(一九五二年一月二四日)〔沈從文全集〕第十九卷、三〇八—三一〇頁
- (22) 沈從文「致張兆和」(一九五二年一月二九日)〔沈從文全集〕第十九卷、三三五頁
- (23) 沈從文「致張兆和」(一九五一年一月一九日)〔沈從文全集〕第十九卷、一八一—一八二頁
- (24) 沈從文「致張兆和」(一九五二年一月二九日)〔沈從文全集〕第十九卷、三三四頁
- (25) 沈從文「致張兆和」(一九五二年一月二四日)〔沈從文全集〕第十九卷、三二一—三二二頁
- (26) 沈從文「致張兆和」(一九五一年一月一九—二五日)〔沈從文全集〕第十九卷、一八〇—一八一頁
- (27) 沈從文「致張兆和」(一九五一年一月一九—二五日)〔沈從文全集〕第十九卷、一七九頁
- (28) 沈從文「抽象的抒情」〔沈從文全集〕第十六卷、五二七頁

訳註

(一) 沈從文(一九〇二—八八年)作家、歴史文物研究者。本名は沈岳煥、筆名に小兵、懋琳、休芸芸など。湖南省鳳凰(現在の湘西土家族苗族自治州)の軍人の家庭に生まれる。苗族。自らも従軍の経験を持つ。一九二四年から北京で創作活動を開始。作家として活動する傍ら、一九二九年以降、中国公学、山東大学、西南聯合大学などで教鞭を執り、四六年から北京

大学国文系教授。四九年、中国歴史博物館に移り、七八年から中国社会科学院歴史研究所研究員。本論文も、作家・沈の作風は「唯美的」と見なされてきた」とするように、文学の功利性を拒否する「芸術派」に属する作家と評価されてきた。人脈や社会関係においても、『現代評論』や『新月』など、「自由主義」を標榜し、左翼文壇に批判的な人々と近く、

彼らの主宰する刊行物に多くの作品を発表した。このような思想上の傾向が原因で、人民中国成立後は批判を浴び、思想改造の対象となった。一般には四九年以降文学創作を放棄した、と目されてきたが、本論文が紹介する書信に窺う限り、批判を受け、自己改造を強いられた期間にあって、暫くの間は新たな文学創作の路を探し求めていたと知れる。しかし、結局は文学創作の筆を折り、古代文物の研究に専念することとなる。この方面の成果も含め、その膨大な仕事は、本論文が依拠する『沈從文全集』全三二巻にほぼ収められている。

(二) 「土改」は「土地改革」の略称。「土改工作団」は「土改工作隊」とも。地主・富農から没収した土地を、貧農に分配するという、中国共産党による土地改革は、一定の成功を収め、「解放区」と呼ばれる共産党の支配地域は徐々に拡大していく。土地改革の成功は、国民党との内戦を勝利に導いた要因の一つでもあった。人民中国成立後の一九五〇年六月、中共政府は、全国的に土地改革を展開するために、「土地改革法」を制定した。政府は各農村に、「土改工作団」を派遣し、その土地の農民を組織・指導する役割を担わせた。多くの地域では、農民による地主糾弾は暴力を伴い、急進化した。このような状況が、中国共産党に期待を寄せていた、いわゆる「民主人士」と呼ばれる知識人を失望させたという面は否定できない。

(三) 一九四九年における沈從文の状況を簡単に整理する。当時沈は北京大学国文系の教授であった。前年の一月下旬から二月にかけて、南京国民政府は、北京在在の学者・文化人に、南方への移住を勧めたが、沈從文はこれを拒否し、北京に留まる。一九四九年一月下旬、北京大学に彼を糾弾するス

ローガン(新月派、現代評論派で、『第三の路』を行く沈從文を打倒せよ)が貼られた後、一月中旬、精神に異常をきたす。三月二十八日午前、首筋に剃刀を入れ、自殺を図るも未遂に終わり、その後精神病院で治療を受ける(翌月退院)。八月、中国歴史博物館へ異動となる。その後、九月二〇日に書かれた、妻と子供宛ての書信では、「大体正常な理性が回復したと思われます」と書いている。

(四) 丁玲(一九〇四〜八六年、湖南省臨澧出身、女性作家。沈從文は丁玲の同棲相手であった胡也頻(一九〇五〜一九三一年、福建省福州出身。詩人、小説家)と親しく、彼との交際を通じて丁玲とも親しくなった。一九三三年五月、丁玲が国民党特務に秘密裡に逮捕された際、沈從文はすぐに文章で消息を公にし、抗議した。また長編の伝記『記丁玲女士』(三四年九月、上海良友圖書印刷公司から『記丁玲』と改題されて単行本化)を上海の『国聞週報』に三三年七月から一二月まで連載し、失踪者への関心を喚起し続けた。一九四九年当時、丁玲は、中華全国文学芸術界聯合会の機関紙『文芸報』主編などの要職を務めており、また土地改革運動を描いた長編小説『太陽照在桑乾河上』(一九四八年)が、五一年にスターリン文学賞を受賞するなど、新政権下において、見事に自己改造を果たした知識人の代表的な存在と目されている。一九八〇年三月、丁玲は『記丁玲』『記丁玲統編』に対する批判文、「也頻与革命」を発表し、晩年に至り両者は決裂してしまふ。

(五) 「華北革命大学」とは「華北人民革命大学」のこと。中国共産党華北局直属の、学習、思想改造を行うために設立された。沈從文は政治研究院に配属された。政治研究院は主に大学教

員で構成されていた。一九五〇年九月三日の日記では、「うわべだけで、遅々とした仕事ぶり、完全に教条学習で、無益な空談で、全くの浪費で、どうして愛国者などになれるのか？」と当時の大学の雰囲気に不満を述べている。

(六) 「保」は人民中国成立以前の行政単位。十戸で「甲」、十甲で「保」、十保で「郷鎮」となった。

(七) 明末、江南の士人を中心に結ばれた政治集団・学派、東林党の盟主、顧憲成(一五五〇～一六一二年、江蘇省無錫出身)の言葉で、「家事国事天下事、事事關心」との対句。

(八) 趙樹理(一九〇六～七〇年、山西省沁水出身)。小説家、戯曲作家。農村と農民に存在する様々な問題を、民間芸能の形式や語りを応用した素朴な筆致で描き、人民大衆への奉仕、民族形式の活用、普及と向上の弁証法的解決を提起し、人民共和國成立後の文芸政策の基礎を据えた毛沢東『文芸講話』(一九四二)の精神を体現した作家と評価された。代表作に短篇『小二黑結婚』、『李有才板話』、中篇『李家莊的変遷』、長編『三里灣』など。

(九) 周立波(一九〇八～七九年、湖南省益陽出身)が一九四八年に発表した長編小説。

(一〇) 「有情」とは、愛憎や情感に基づき自然、人事、歴史、伝統に向き合い、それらを理解する態度をいうだろう。訳注(一一)の「事功」(功利主義的な態度)の対極にある態度。沈從文は、例えば現実生活を充たす豊饒に耽溺する態度と、それを抽象化してイデオロギーとして理解する態度を「現象／道理」の対立と概括するなど、自前の概念、用語を用いて、世界を二項対立として解釈することを好んだように思われる。ここでの「有情／事功」も同様であろう。自前の用語である

だけに、訳出は難しいが、日本語の所謂「有情」ともほぼ重なると思われるので、ここでは敢えて別の言葉に置き換えることはしなかった。

(一一) それぞれ李広(?～前一一九年)、前漢の名將。文帝の時、匈奴を討って功をたてた(『史記』李將軍列伝・第四十九卷)。

竇嬰は文帝の後、竇皇后の從兄の子の魏其侯のこと(『史記』魏其武安公列伝・第四十七卷)。衛青(?～前一〇六年)、前漢の武帝に仕えた將軍。匈奴討伐に功あり。霍去病(前一四〇頃～前一一七年)、前漢の武帝時代の武將。叔父の衛青(?～前一〇六年)とともに匈奴をゴビ砂漠の北に駆逐した(『史記』衛將軍驍騎將軍列伝・第五十一卷)。司馬相如(前一七九～前一一七年)、前漢の文人で成都出身。字は長卿。その華麗な賦は漢・魏・六朝時代の文人の模範となった(『史記』司馬相如列伝・第五十七卷)。

(一二) 現在は湖南省麻陽苗族自治県。

(一三) 『東周列国志』のこと。西周の滅亡(紀元前七七年)から秦始皇帝による中国統一(同二二一年)までの五五〇年間、春秋戦国時代の出来事が描かれる。明末に馮夢竜が著した歴史小説『新列国志』を清代中期、蔡元放が改訂し、書名を『東周列国志』とした。

(一四) 「湘」は湖南地域の略称。

(一五) 沈從文の代表作とされる『邊城』はまず『国聞週報』第一卷第一期から四期(一九三四年一月一日から一月二二日)に連載され、一度中断後、同年第二期から一六期(同年三月一日から四月二三日)にわたり連載を再開、完結。一九三四年、上海の生活書店から単行本刊行。

(一六) 『湘行散記』は全十二編。一九三四年、三五年に書かれ、

一九三六年に上海の商務印書館から単行本刊行。

(二七) 現在は湖南省湘西土家族苗族自治州に属する。鳳凰県は湖南省西南部に位置し、その南が麻陽県である。湘西の丘陵地区、沱江の中下流域に位置し、全県にわたり山地が多い。

(二八) 小説『雪晴』は一九四六年一月の執筆。同年一月十七日に北平『経世日報・文芸』、さらに一月四日に『中国日報・文芸週刊』に発表された。『沈從文全集』第一〇巻所収。

(二九) 『保靖』は現在の湖南省保靖県。小学校卒業後、家運が傾き湘南軍閥の一兵卒となった沈從文が一九二二—二三年の間駐屯していた場所である。そこで、沈從文は読み書きできるということ、書記官の役職に就くことになり、多くの書物に接する機会を得た。

(三〇) 明代嘉靖年間(一五二二—一五六六年)に何鏗が収集、分類した、漢から六朝におよぶ著作数百種から、一五九二年に程榮が三十八種を選び、『漢魏叢書』と名付けた。ここで沈がいうのは、三十八種本における第三十四卷『風俗通義』であろう。(二二) 「事功」は、権力の掌握、栄達、蓄財など、世俗における成功や名声、およびそれらを第一義と考える態度のこと。訳注(一〇)参照。「有情」と同様、そのままの形で用いた。

(三二) 沈從文夫人。一九一〇年安徽省合肥に生まれる。一九二九年九月から沈從文が中国公学講師を務めた際に知り合う。当時、彼女は外国語文学系二年生であった。一九三三年に結婚。一九三四年に長男の竜朱が、三七年に二男の虎雛が誕生した。二〇〇三年没。

(三三) 管仲(？前六四五年)、春秋時代の齊の宰相、晏嬰(紀元前六世紀後半)は春秋時代、齊の政治家。管仲とともに名臣と称される(『史記』管・晏列伝・第二卷)。張良(？一

八九年)、蕭何(？前一九三年)はともに漢の高祖の功臣(『史記』留侯世家・第二十五卷、『史記』蕭相国世家・第二十三卷)。

(三四) 『史記』は、「本紀」十二卷、「表」十卷、「書」八卷、「世家」三十卷、「列伝」七十卷の計一三〇巻から構成されている。「本紀」が五帝から漢の武帝までの帝王の記録。「表」は太古の王朝の系譜、東周期や漢代の諸侯の年表、漢王朝の官吏の在職年表などが、表の形で一覽できるようにしている。「書」は音楽、天文、治水、経済など古代の文化史、制度史をまとめた部分。「世家」は周代から前漢にいたる、諸侯の国の歴史を「本紀」と同様に編年体で記している。周代の封建諸侯の歴史を著述した部分と、張良や蕭何などの漢王朝の功臣や王族の伝記とに分かれている。「列伝」は個人の伝記を集めた部分。

(三五) 『詩経』は中国最古の詩集。西周から東周にかけて(前九世紀—前七世紀)の歌謡三百五編を収める。伝承によれば孔子の編集によるとされる。全体の構成は「風(民謡)」「雅(朝廷の音楽)」「頌(祖先の徳を讃える歌)」の三部門に分かれる。(二六) 二卷。春秋時代の左丘明の著と伝えられる。春秋戦国の八国(周、魯、齊、晋、鄭、楚、呉、越)の貴族の言論を主として記し、『春秋』左氏伝を補充する。

(二七) 後漢の建安年間(一九六—二九年)、曹操父子を中心とする文学集団に属した七人の文士。孔融、陳琳、王粲、徐幹、阮瑀、応瑒、劉楨をいう。また「鄴下七子」ともいう。

(Zhang Xinying/復旦大学中文系教授)
(あへ) みきお/博士後期課程
(さかい) ひろぶみ/言語社会研究科教授